

発言の仕分けに着目したファシリテーターの学習手法

Facilitation Learning Methods

Focusing on the Sorting of Remarks in Discussions-

新目 紗也^{*1}, 仲林 清^{*1}
 Saya ARAME^{*1}, Kiyoshi NAKABAYASHI^{*1}
^{*1}千葉工業大学院情報科学研究科

^{*1} Graduate School of Information and Computer Science, Chiba Institute of Technology
 Email: s1732005ee@s.chibakoudai.jp

あらまし：ファシリテーション未経験者に、ファシリテーションの方法を学習させ、実際の議論で活用させることで、チームの問題解決能力を向上させることを目的とした学習手法を開発した。学習は2回に分け、1回目に態度に重点を置いた学習、2回目に知的技能に重点を置いた学習を行った。議論の発言内容を論点提示や制約条件確認などのカテゴリーに分類し、流れを構造化して、学習の効果に与える影響を評価する。今回は予定している実験の変更点を述べる。

キーワード：ファシリテーション, 問題解決, グループディスカッション

1. はじめに

問題解決では、チームで目標を共有して成果を出すことが期待されるが、複数人で合意形成を行うことは、総論賛成・各論反対などの問題が生じるため難しい。本研究では、ファシリテーション未経験者に、ファシリテーションの方法を学習させ、実践させることでチームの問題解決能力を向上させることを目的とした学習手法を開発する。今回はすでに発表した実験⁽¹⁾からの変更点や予定している分析方法を述べる。

2. ファシリテーターの学習内容

2.1 ファシリテーション

図1に問題解決の過程とファシリテーション技術の対応を示す。問題解決の過程には、現状を正確に把握し、目標となるあるべき姿を定義、現状とあるべき姿のギャップを問題として捉え、解決していく一連の流れがある。その中で、ファシリテーションの技術はファシリテーターが議論の前に行う「仕込み」と議論中に行う「さばき」に分けられる。「仕込み」の過程では、会議の目的や前提、結論を出すべき論点を設定し議論の骨格を作る。「さばき」は、議論中に、メンバーとのコミュニケーションにおいて、「引き出し、決めさせ、自ら動くことを助ける」ことを円滑に行うための技術である。

2.2 学習目標

本研究では、ファシリテーションの学習内容として、「さばき」に焦点を当てる。そのため、課題とする問題解決のタイプを、専門知識を必要とせず、目的が明確なタイプとし、具体的には日帰り旅行の計画を題材にした課題を与える。ファシリテーターの学習は、学習成果の5分類⁽²⁾のうち知的技能と態度の習得を目標とした。具体的な内容を表1に示す。1回目の学習では態度に重点を置き、2回目の学習では知的技能に重点を置いて学習を行った。

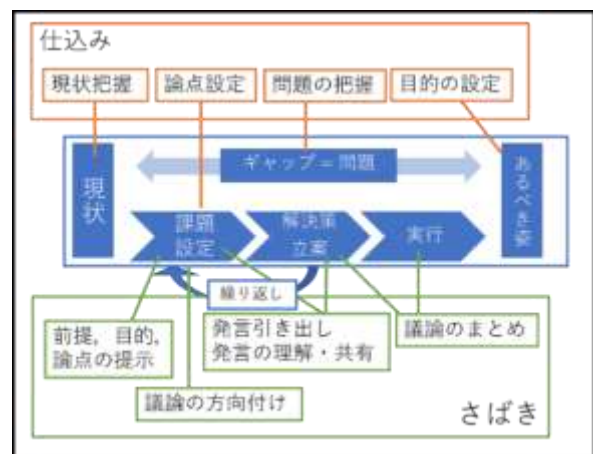


図1 問題解決の過程とファシリテーション技術の対応

表1 習得内容

態度	ファシリテーションの目的や必要とされる背景 ファシリテーターのコミュニケーションの特徴 メンバーが腹落ちすることの意義と目的の理解 メンバーの発言を引き出そうとする姿勢 メンバーの意見を尊重する姿勢
知的技能	議論の前提、目的、論点の提示をする 意義と目的の理解 メンバーの発言を引き出す・理解を深める方法 メンバーの発言を共有する意義と目的の理解 議論を方向付ける方法 議論の収束に必要な意見の取捨選択の 意義と目的の理解

3. 実験課題

すでに発表した実験⁽¹⁾から次の実験に向けての改善点を表2に示す。実験課題として扱う問題解決のタイプは変えず、具体的な課題の内容を改善した。被験者の立場の設定では、被験者自身が行く旅行のプランを自分達で計画するという設定としていたが、

自分の要望だと他の制約や要望を満たす計画を立てるために自分の要望の優先度を下げる可能性があるため、被験者の立場を計画した旅行を提供する立場とした。また、被験者に与える要望はお客から与えられた要望とし、優先度も明示した。

制約については、1回目の議論では全ての条件を満たす解決策があるのに対し、2回目の議論では全ての条件を満たす解決策はないように設定して難易度を上げた。また、今回は1回目の議論で要望のみ、2回目の議論で制約に予算を追加して議論の難易度を調整していたが、2回ともお客の要望の中に予算の要望も含めて提示するように変更した。

表2 実験課題の変更箇所と変更したポイント

変更箇所	変更したポイント(前回→今回)
被験者の立場の設定	被験者が旅行に行く
	被験者が旅行プランを提供する
要望と制約を満たす解決策	2回とも要望と制約を全て満たす解決策がある
	1回目は解決策がある、 2回目は解決策がない
与える制約の設定	1回目に要望、2回目に要望と予算
	2回とも要望と予算

4. 分析方法

本研究では、ファシリテーターとメンバーへのアンケート結果とインタビュー結果から学習の効果やファシリテーターの変化がメンバーに与える影響を調査する。また、議論の流れを構造化して分析し、学習の効果が議論に与える影響を調査する。

4.1 アンケートの変更点

表3 ファシリテーターへのアンケート項目

事前アンケート	議論の経験の有無と状況 議論での自分の立場や積極性 議論の場で意識すること チームでの活動経験の有無と状況 チーム活動での自分の積極性
態度の学習前	司会進行のイメージ・理想 リーダーのイメージ・理想
態度の学習後	ファシリテーターへのモチベーション ファシリテーションの目的、理想 自分の経験とファシリテーターの比較
知的技能の学習後	ファシリテーターへのモチベーション 講義内の議術の目的(予告あり) ファシリテーションの目的、理想 これまでの経験との比較
議論前	ファシリテーターへのモチベーション ファシリテーターとして意識すること
議論後	ファシリテーターへのモチベーション 講義内容でできた・できなかったこと 議論中で大変または楽に感じたこと これまでの議論経験との比較

変更したファシリテーターへのアンケートと項目を表3に示す。今回は、事前アンケートと議論後の3回のみ行っていた。今回は、事前アンケート、態度の学習前後、1回目の議論前後、知的技能の学習後、2回目の議論前後で8回行う。

事前アンケートや態度の学習前アンケートでは、被験者の議論の経験やリーダーのイメージについて回答させ、態度の学習で学ぶ内容について被験者の経験を活性化させる。また、事前アンケートと2回の議論前アンケートで「議論で意識すること」に回答させ、学習や実践を通して変化するかを調査する。態度の学習後と知的技能の学習後では、共通して「ファシリテーションの目的、理想」に回答させ、学習や実践を通してファシリテーションへの理解が変化するかを調査する。また、議論後アンケートや知的技能の学習後に自分の経験と学習内容を比較させる。学習内容と経験を結びつけて学習を促進させる。

4.2 議論の分析

議論の流れを構造化するため、議論中の発言を「論点」、「確認」、「推論」、「吟味」の4種類に分類する⁽³⁾。発言の分類と基準、例を表4に示す。

分類のうち、「論点」は話し合う論点についての明確な言及、「確認」は配布資料中の情報やメンバーの要望、制約などの事実について確認する発言である。「推論」は事実を基に自分の考えや解決策を提案する発言、「吟味」は提案や解決策について事実や制約と整合性が取れているかを確認する発言である。

表4 発言の分類・基準・例

分類	分類の基準と例
論点	論点についての言及 ファ「まずやっぱり、あれじゃないですか、どこから決めた方が良くと思いますか？候補地ですかね」
	確認 資料の情報、条件など事実についての確認 メンバー3「場所、アクセスのところが、なんか微妙にCの方が良い」
推論	自分の考えを述べる メンバー3「それが、できれば午前中に山でバーベキューして、午後に海岸で花火やって帰る」
	吟味 推論内容と事実の整合性を確かめるなど ファ「確かに、でもこれあれですよ、1日の予定だから、多分それ大丈夫だと思うんですよ」

参考文献

- (1) 新目紗也, 仲林清: 議論における発言の仕分けに着目したファシリテーションの学習手法, 教育システム情報学会研究報告 Vol.36, No.1 (2021-5) pp.23-30
- (2) C・M.ライゲルース, A・A.カー・シェルマン(編), 鈴木克明, 林雄介(監訳): インストラクショナルデザインの理論とモデル 共通知識基盤の構築に向けて, 北大路書房 (2016), p.p45-63
- (3) 遠山紗矢香, 白水始: 協調的問題解決能力をいかに評価するか-協調問題解決過程の対話データを用いた横断分析- Cognitive Studies, 24(4), (Dec.2017), 494-517